『イェマシー族』のアンビヴァレンス
―神話と政治の間―

Demythicizing the American Myth : Ambivalence in *The Yemassee*

中　村　正　廣

シムズ（William Gilmore Simms）の『イェマシー族』はクーパーの『モヒカン族の最後の者』に刺激されて書かれたロマンスであり、従来その二番煎じ的作品という評価しか受けてきていない。唯一パーク・ベンジャミンがクーパーの作品をも凌駕しているとして最高の賛辞を贈っているが、[1]これは例外的評価と捉えてよいだろう。高い評価が与えられていない原因は、『イェマシー族』を一読すればすぐに了解できる。インディアンの強制移住もやむなしとする政治姿勢が赤裸々に見られ、インディアンが人種的次元でしか扱われず、荒野と文明の衝突というアメリカ神話の枠組の中で捉えられていないからである。『モヒカン族の最後の者』と『イェマシー族』の顕著な違いは、前者ではインディアンの部族は既に一国家としての機能を失っているばかりか、英仏の植民地戦争の中で個々のインディアンも主体喪失の状態にあるが、後者では一国家としてのイェマシー族が英植民地と衝突しているという点にある。ほぼインディアンが自分の回りの世界から消滅していたクーパーの場合と違い、シムズは幼くして幾多のインディアンの物語を祖母から聞き、青年期には南西部を旅してインディアンの村を具に観察し、その生活にかなりの関心を抱いた。シムズにと

ってインディアンは現前する実存であり、白人の理想とする荒野や自然の住民という神話的次元に押しとどめることのできないものであった。

神話の定義は難解を極めるが、仮に「深い宗教的要求、道徳的願望、社会的服従、実際的必要を満足させるために語られたもの」[2]、「人間の願望の究極、もしくはそれに近いところに位置する行為の模倣」[3]であるとしてみよう。いや、これら「神話・象徴」批評を攻撃し訂正しようとする最近の「文化覇権」理論に従って、「望ましいばかりか自然でもあるデザインに従って中流階級が作った」動的なアメリカの理想との作家たちの様々な形での衝突としてみよう。[4]歴史から解放され自らの力によって立つアダム的ヴィジョンを信奉していたアメリカ作家の数は少なくはない。しかし、R.W.B.ルーイスの言葉にもあるように、ホーソーンやメルヴィルといった「アイロニー派」の作品もアメリカ神話の明るさから逆説的に生まれた悲劇であった。[5]彼らも至福千年のヴィジョンをアメリカに抱いていたからこそ、彼らの国の進歩の過程に憂慮したとも言える。ここで注目すべきことは、同時に神話は歴史的、政治的、文化的に比較対照されるような他の実体の存在を決して認めないことだ。アメリカ神話の中ではインディアンは主体性を失わずに実存することを決して許されず、西洋人の持つ象徴システムの中でしか機能しない。ロラン・バルトの『表徴の帝国』の一節を転用させてもらえば、西洋人はインディアンの本質などに憧れのまなざしを注いだことはないし、興味はなかったのだ。[6]

無論シムズもこのアメリカ神話の影響を完全に免れることはできなかったが、しかし、彼は神話化という抽象的象徴的思考の世界から程遠い世界に位置していた。ピューリタニズム的思考に無縁であるばかりか、これに真っ向から対立した彼は、歴史的、哲学的、文化的、文学的マイナス面を多く甘受しなければならなかったが、同時に文化覇権主義の危険性を捉えることもできた。インディアン強制排除という政治問題を、荒野と文明の衝突というアメリカ神話、言え換えれば自然との自我一体意識という、歴史と社会からの神話的逃亡に変容させることはしなかった。シムズが新し

いインディアン神話を書くのだと『イェマシー族』の序文で言明したとき、それは「俗世間のインディアン観」[7]を矯正するためでしかなく、インディアンを新たな神話の世界に幽閉するためではなかった。

『イェマシー族』は二種の意味で政治的である。このロマンスは素材にしている1715年のイェマシー族の蜂起とその挫折を描いているが、百年後の世界からただ単に過去を断罪するために書かれた歴史ロマンスでは決してない。『イェマシー族』が執筆された当時のアメリカ南部は、この作品にもその名が登場するチェロキーインディアンの強制移住問題で興奮の坩堝の中にあった。高度にアメリカ化し文明化したチェロキーインディアンをジョージア州市民が「涙の道」に強制的に追いやり、多くの被害者を生み出した恥ずべき事件がまさに起こらんとする矢先のことであった。当時のアメリカは浪漫的ナショナリズムの勃興と州の権利の拡大とが、皮肉にもインディアンの側の独立と国家主義と対立した時代であったのである。[3] つまり、英西衝突の中でイェマシー族が自由を求めて蜂起した過去の事件は、白人のフロンティア精神と対決する中インディアンが独立自尊とナショナリズムを求めた「現在」を照射するものであったし、現在と対等の価値を有するものであった。

かつ又1835年から白人が衝突することになるセミノール族をイェマシー族の子孫と見ていた[9]シムズ自身、浪漫的ナショナリズムと州の権利の拡大の問題の間で揺れ動き、またインディアンの自主独立の傾向に関心ばかりか憧憬をも抱いていた。このような緊張の中で『イェマシー族』は執筆されたのである。本稿の目的は神話化を拒否するこの作品が政治的である点を逆に積極的に評価することであり、結論として、二つの文化が対決し衝突する歴史的政治的展開に対して、作家シムズが極めて微妙でアンビヴァレントな姿勢を持っていたことを指摘したい。

『イェマシー族』の具体的分析に入る前に、少々紙面を割いてでも粗筋について是非とも触れておかねばならない。シムズの作品の中で『イェマシー族』だけは読み継がれてきたとは言え、『モヒカン族の最後の者』の

焼き直しとしての評価しか受けてきていないため、ストーリーすら知らない読者も多いと思われるからである。

場面は1715年、イェマシー族の酋長サヌーティが白人の強欲と領土侵犯に業を煮やし、武装蜂起の策略を胸中に抱いて自分のウィグワムを後にするところから始まる。道中一頭の鹿に矢を命中させたサヌーティであったが、鹿を完全に仕止めたのはスペインの海賊のコーリーであった。サヌーティの犬が鹿に食らいついたのを退けようとしたコーリーは犬に襲われ、これを殺す。これが原因でサヌーティとコーリーは死闘を繰り広げる。二人を止めに入ったのが白人植民地で隊長と呼ばれているガブリエル・ハリソン（実は総督のクレイヴン卿）であった。コーリーをスペイン人の使者と読んだハリソンは、従僕の黒人ヘクターをスパイとして潜伏させ、自分はその場を退散する。ハリソンは恋人エリザベスに会いにマシューズ牧師の家に行き、帰りしなにイェマシー族の不穏な動きを牧師に警告するが、相手にされない。一方、イェマシー族の町のポコタ＝リゴに向かったサヌーティたちは、白人の贈り物に目を奪われた他の酋長たち（この中にはサヌーティの息子オコネストーガの姿もあった）がイェマシーの土地を譲渡する協定に調印したことに怒り、他のインディアンを従えて議事堂を包囲、土地譲渡に賛成した酋長たちを惨殺、白人たちをほうほうの体で退散させる。事件をブロックハウスで知ったハリソンは仲間に集合をかけ、警戒態勢を取る。話変わって、父親サヌーティの手から逃れたオコネストーガは、森の中でハリソンを待っていたエリザベスがガラガラ蛇に襲われるところを助け、ハリソンとともにブロックハウスに身を寄せる。ここでイギリス人、インディアン両方のために平和が必要だとハリソンに説得されたオコネストーガは、イェマシー族の動向を調べるためにポコタ＝リゴの町に潜入するが、捕まってしまう。彼は部族の皆の前でイェマシーのトーテムを剝ぎ取られるという屈辱的な刑罰を下されるが、その直前に母親のマチワンが自分の手で息子を殺し、この恥辱から息子を救う。オコネストーガが戻らないことに業を煮やしたハリソンは自らポコタ＝リゴに潜入、これま

た捕らえられてしまうが、息子オコネストーガを思うマチワンの手で救出される。かくしてイェマシー族と白人植民地の熾烈な戦いが始まる。エリザベスを横取りされたことでハリソンと徹底的に対立していたヒュー・グレイソンたちの活躍などにより、最初劣勢にあった植民地側は少しずつ挽回し、結局戦いはインディアン側の徹底的敗北に終わり、サヌーティは負傷して死ぬ。ひとり残されたマチワンは、マネイトウの神聖なる谷で夫と息子が部族の者たちと一緒に自分の方を眺めているのを呆然としながら感じていた。

物語冒頭の鹿をめぐっての争いはクーパーの『開拓者』を想起させる。『開拓者』ではエドワーズ（チンガチグックの息子として登場するが実はイギリス人)、テンプル判事、ナティが一頭の鹿を仕止める。誰が仕止めたかわからぬ曖昧な状況の中でナティが裁断を下し、判事もエドワーズのものと認めるが、判事のいとこのリチャードはこれをうやむやにしてしまう。しかし、この事件を契機に、負傷したエドワーズは復讐の相手である判事の屋敷に住むようになり、様々な変遷を経て二人は和解する。この作品の中では既にインディアンは白人によって駆逐されており、クーパーの関心は土地所有権の譲渡の正当化にあると言っても過言ではない。チンガチグックは白人のたいまつが引き起こした山火事という偶発的事件の中で死に絶え、荒野の住人であるナティが一人さらに西の方へ後退していかざるをえない哀愁が作品全体を通じて醸し出されている。

『イェマシー族』ではサヌーティが鹿の横腹を矢で射抜きながら、コーリーが銃で鹿を仕止め、殺されかけたサヌーティをハリソンが銃で助けようとする。巨大化した白人勢力の中で、スペインとイギリスにもて遊ばれるインディアンの姿が象徴的に描かれている。鹿の所有権の主張に躍起となっているのはインディアンを同じ人間とは思わぬコーリーであり、インディアンが強制排除されるのもやむなしと考えるハリソンである。実際、コーリーを押さえつけたハリソンは結局は銃の力を評価し、鹿をコーリーのものと断定するのだ。サヌーティには発言の機会すら与えられていない

という意味においては、『開拓者』の中のチンガチグック（小説ではほとんど白人名ジョン・モヒーガンで呼ばれていることも象徴的である）と同じ次元の扱いを受けているとも言える。しかし、サヌーティは未だに歴史の中では主体性を失わずに行動しているイェマシー族国家の長であり、逆にスペインとイギリスの衝突を巧みに使って白人勢力を駆逐しようともくろんでいるのだ。そして、そのもくろみは圧倒的な白人勢力による征服というアメリカの歴史的展開の前に脆くも挫折する運命にある。この意味で『イェマシー族』は神話化以前の段階に位置していると言ってよい。

ふたつの異種の文化の衝突の中で、主人公ハリソンは初めこそ白人とインディアンの衝突を避けたいとの願いで行動するが、議会の「土地を占有しようとする馬鹿げた欲望」(p.121) を非難はするものの、「イェマシー族をあまり刺激せぬ方がよい」(p.121) といった消極的な対応しかしていない。物語の早い時点において衝突を避けようとする試みはサヌーティからも拒否されるが、ハリソン自身白人の押し寄せる波は防ぎようがないこと、そして二つの文化は共存できないことを意識しているのである。「全ての階級、全ての膚の色、全ての部族と国家、キリストの子らが一緒になれる時代」(p.152) の到来を願うマシューズ牧師に対して、ハリソンははっきりと自分の見解を表明している。

> ......I am not willing to agree with you that our desire to procure their land is at all inconsistent with the prayer. Until they shall adopt our pursuits, or we theirs, we can never form the one community for which your prayer is sent up; and so long as the hunting lands are abundant, the seductions of that mode of life will always baffle the approach of civilization among the Indians.... (p.152)

ここでは白人の土地に対する強欲と侵略は、インディアンを文明化するためにはやむなしということで正当化すらされている。インディアンが自由

に使える土地が残されているからこそ、インディアンを文明化できないとまでハリソンは言明するのだ。

イェマシー族が白人文明の侵入に対して疑問を抱き始めたのは個個人の暴挙のためばかりではない。確かに「我々のヨーロッパ人の先祖たちは多くの点で法外な悪漢たちであった」(p.256) が、「カロライナの総督であり領主であったクレイヴン卿が、短期間の内に近隣部族に戦争を仕掛けてこれに勝利し、彼の政府の政策を見事に成功させたため」(pp.29-30) に、イェマシー族の心に疑念が生まれたのである。ここにハリソンと暴挙を働く冒険家の差異は実に微妙で判別しがたいものになる。そして、彼がクーソー族の酋長チナビィを殺すときの言葉は、敵対するインディアンを完全に抹殺することに快感すら抱いていることを思わせる。

> "Coosaw....thou art the last chief of thy people. The cunning serpent will die by Coosah-moray-te, like the rest....The Coosah-moray-te will strike. Chinnabee is the last chief of the Coosaw-his people have gone-they wait for him with the cry of a bird. Let the pale-face strike. Ah! ha!" (pp. 381-382)

主人公ハリソンの言動がどの程度までシムズの見解を反映しているのかを考察する際、現実にイェマシー族と対決した歴史的人物であるという点を斟酌しても、我々読者にハリソンが物語の主人公としては実に平板な印象しか与えないことを考慮する必要がある。加えて、彼が主張する文明化か絶滅かという二者択一は、マドックスも指摘するように19世紀のインディアン問題が生み出した典型的なレトリックであり、[10]多分に類型的である。この立場に終始する彼がイェマシー族との接触から得るところは皆無であり、彼はもろもろの関係の中で膠着した状態にある。逆に読者の脳裏に焼きつくのは、ハリソンに最初から敵愾心を燃やし、彼と対立する人物ヒュー・グレイソンである。この人物をシムズがどのように描写している

かを分析する方がこの意味で重要であろう。

彼は紳士を特別扱いする社会、階級制度の存在をいつも腹立たしく思っており、盲目的に紳士を敬愛する兄や回りの連中を軽蔑している。

> Even here in these woods, with a poor neighbourhood, and surrounded by those who are unhonoured and unknown in society, they—the slaves that they are!—they seek for artificial forms, and bind themselves with constraints that can only have a sanction in the degradation of the many. They yield the noble and true attributes of a generous nature, and make themselves subservient to a name and a mark—thus it is that fathers enslave their children....Life itself is discontent—hope, which is one of our chief sources of enjoyment, is discontent, since it seeks that which it has not. Content is a sluggard and should be a slave.... (p.244)

だが、彼はピューリタンであるマシューズとは違う。マシューズはサヌーティの不満の原因も憶測できないばかりか、インディアンの不穏な動きの情報を最後まで信用せず家族を危険に晒す洞察力のない人物として描かれているが、ヒュー・グレイソンはこの轍を踏まないように変化する役割をあてがわれている。ハリソンが実はクレイヴン卿であるとわかるまでは穏やかならぬ感情を持ち続けるものの、ヒューはインディアンの暴動の可能性を事前に察知し、マシューズの理想論に対して次のような人種観を披露する。

> We differ, Mr. Matthews, about the propriety of the measure, for it is utterly impossible that the whites and Indians should ever live together and agree. The nature of things is against it, and the very difference between the two, that of colour, perceptible to our most

> ready sentinel, the sight, must always constitute them an inferior caste in our minds. Apart from this, an obvious superiority in arts and education must soon force upon them the consciousness of their inferiority. When this relationship is considered, in connexion with the uncertainty of their resources and means of life, it will be seen that, after a while, they must not only be inferior, but they must become dependant. When this happens, and it will happen with the diminution of their hunting lands, circumscribed, daily, more and more, as they are by our approaches, they must become degraded, and sink into slavery and destitution...;and to my mind, the best thing we can do for them is to send them as far as possible from communion with our people. (pp. 302-303)

憤懣やる方ない彼は偶然通りかかったハリソンに襲いかかり、殺そうとするが、突然殺しを断念した挙げ句、逆にハリソンに説教され、母親たちをブロックハウスに連れて行く任務をハリソンから頼まれる。上の引用はこの後マシューズ牧師の家に立ち寄った母親を前に、牧師を説得する場面の言葉である。溺れかかったオコネストーガを助け、その惨めな姿の中にもインディアン独特の不撓不屈の精神を見た彼ならではの見解だが、ハリソンと同様白人による土地掠奪の罪科は問われず、白人文明との接触による堕落からインディアンを救うには強制移住させるしかないという論法である。マシューズと同様にイェマシー族の不満を完全には理解しえないハリソンは、インディアンに対して白人文明への同化か死のいずれかの選択を迫るが、膚の色の違う人種は同一社会には共存できないというヒュー・グレイソンは、インディアンには強制移住の道しか残されていないと断定する。農作を侮蔑し、自ら劣等感に懊悩し、「奴隷的状況」を拒否して自主独立を主張する彼は、インディアンに対してある程度の感情移入はできる。しかし、インディアンと彼自身は膚の色という点で決定的に区別され

る。白人である彼はキリスト教的良心によって自らの「きまぐれな激情」と「下劣さ」(p.314) を後悔し、白人社会に復帰できる。結局ヒューはハリソンに「王子のもつ気ままさと高潔さ」(p.391) を感得し、部隊の指揮官に指名された彼は、総督と判明したハリソンの前に進み出て、これを満足げに引き受けるのである。

平板な人物であるハリソンとは対照的に現実味を帯びたヒュー・グレイソンのこの変化に、シムズの大きなメッセージが潜んでいることは既に明らかになったと思う。功罪はどうであれ、ハリソンが必死に維持しようとするイギリス植民地の発展と安定がいかに不可欠かということである。これは取りも直さず、歴史は様々な矛盾を抱きかかえながらも進歩と安定に向かって進んでいると信じるシムズの歴史観を露呈しているとも言える。白人がインディアンの土地を侵略するのは歴史の必然であり、個人の手に負えぬものだ。この力を前にして、愛国主義は空疎なプロパガンダに転落し、平和と自由の主張も単なるまやかしに変容し、シムズによってマクシミラン・ニコルズ医師とともに一蹴される。インディアンと白人が共存できないのもこれまた必然なのであり、また社会の安定のためには階級制度も不可欠だとしているのである。ヒュー・グレイソンの階級的不満もマシューズ牧師の的はずれの理想も歴史的展開には不適切なものとして排除されているばかりか、それらはフロンティアのエネルギーに飲み込まれ、消えていくしかない。

以上の作品の展開が喜劇的構成を下に成立していることは明らかだ。ハリソンとエリザベスがマシューズの反対という障壁に遭いながら、インディアンの暴動を契機にどんでん返しが起こって結末近くで二人は結ばれるという筋立てである。非道徳的で無責任な若者と思われていたハリソンが、登場人物が皆会した中で総督であることが判明し、偏屈な老人の理想が妄想であることが暴露される。そしてこれはただ二人の幸福を可能にするだけでなく、二人のまわりに新しい社会、アングリカンとピューリタンの宗教的衝突、貴族と中産階級の闘争といった対立が融和する社会が結晶する。

読者を楽しませようとするロマンスが元来喜劇的要素を兼備し、「陰謀を根幹とし結婚に至る変通自在なプロットと、同時代の生活に典型的に見受けられる普遍的人物とのコンビネーション」[11]にその完全な姿があるとすれば、シムズの筋立てもこれを踏襲したものと言える。

しかし、余りにも作為的に見える印象を読者にこの結末が与えてしまうのは、ハリソンとマシューズ牧師の対立、ヒュー・グレイソンの階級制度への不満と独立独歩を求める苦悩がインディアンの暴動鎮圧の中に影を潜めてしまっているからである。ハリソンの言動に敵意を感じたヒューは、ハリソンにとどめを刺さんとしているとき突然母親の祈り（この老婦人は典型的なピューリタンで、退却するときに大きな声で祈禱し、息子のウォルターを徹底的に悩ますのだ）が脳裏に浮かび、殺しを断念してしまうし、またハリソンが総督と判明するやハリソンに従うことを約束し、それを栄誉と捉える。マシューズ牧師はハリソンに救われた直後はしぶしぶと自分の非を認めておきながら、ハリソンが総督と判明するや娘との結婚を祝福する。このようにシムズが叙述する二人の変化は作為的行為が赤裸々であり、到底読者を満足させるものではない。いかにヒューが「欠点はたくさんあったものの実は高潔な人物」（p.345）であり、エリザベスから発せられた痛烈な非難が彼に反省を促し、男らしさが持つ厳粛な決断力を引き出したシムズが主張したとしても、ハリソンが長として立つ世襲貴族的階級制度へのヒューの不満、その制度が引き起こす苦悩は解消されたとは言えない。また、マシューズが植民地議会に不満を持ちながらもクレイヴン総督は立派な人物と捉えていることがマシューズの言葉の中に明示されていたとしても、総督の議会への指導力の無さが逆に強調されてしまう結果となり、物語の展開に確証を与えることにはならない。また、ハリソンが総督と判明することで、娘の結婚相手の家格に拘泥したマシューズの不満は解消されたように見えるが、ハリソンとマシューズの衝突の最大原因は世界観の対立であり、性格の違いであったはずだ。さらに、クレイヴン卿が一般人のハリソンに姿を変え、典型的アメリカ人として行動することに

よって回りの人間を感化するのが目的であるとしても、ウォルター・グレイソンなど緑のジャケット党員を除いてはその影響力はわずかであり、決して成功しているとは言い難い。John P. McWilliams, Jr. の次のような不満は誰もが抱くものと言える。

> In addition to Simms's Indian chapters, which make up twenty of the book's fifty-two chapters, there are pages upon pages of predictable rescues, walking stereotypes, forced humor, insufferable courtships, and adventure episodes that in no way further the confrontation of the two cultures.[12]

シムズが提示する解決策を、当時シムズが抱いていたチャールストンの偏狭な貴族社会への帰属願望の表明と読むのもひとつの解釈かもしれない。確かに黒人の従僕ヘクターの描写や社会階級制度を是認するようなストーリーの展開は、南北戦争以前の南部の社会にしっかり根を下ろした作家でなければ書けなかったものだろう。しかし、『イェマシー族』を執筆していたときのシムズは、南部を題材にしていたとしても少なくとも偏狭な南部社会に囚われていなかったし、州における連邦法実施拒否問題ではこれを攻撃して逆に南部社会と対立していた。『シティ・ガゼット』の編集長をしていたシムズは1830年９月にその政治的信条を糾弾する数百名の暴徒に襲われており、南部人の激昂しやすい性格を非難している。加えてシムズは自分の作品を唯一購読してくれる北部の読者に目を向けざるをえなかった。その意味では、自家撞着をも辞さず現実を直視しながら、結局現実容認に傾いたシムズの歴史観が、フロンティアの拡大に狂喜する当時の一般読者の願望とくしくも一致した結末とも言えるのである。

だが、それでも作為的という印象は依然として残る。当時の一般読者に迎合した結末という解釈はこの印象の解明にはいささかの助けにもならないのである。では、マシューズ牧師とヒュー・グレイソンの二人がハリソ

ンとの関係においてその敵意や桎梏の原因を解消しない形で和解しているという事実は何を物語るのであろうか。「好きな人物のことであれば読者に徹底的に精通させるほど詳細に描く」[13]のを宗とするシムズが、何故にこのような筋の展開を読者に強要するのであろうか。

シムズが言う歴史的必然は個人の力で統制しようがない、一人歩きする巨大なフロンティア願望のエネルギーに集約されるだけではない。排除される側のインディアンという悲劇的要素なくしては歴史は前進しないのだ。そもそもハリソンが最終的に植民地を勝利に導くことができたのはなぜか。マチワンの助けがなければハリソンがポコタ＝リゴから逃げ帰れなかったことは明らかである。さらに、他方でマチワンがオコネストーガに肉体的死を与えたことを考慮すれば、マチワンこそが植民地を救い、インディアンを物理的に消滅させたものと考えられる。彼女がこの二つの行為を取ったのは息子への思いである。イェマシー族の一員としての名誉を息子に対して永遠に保証せんがために彼女は息子を殺すのである。作品の結末場面でもマチワンは苦悩こそ言葉に表さないが、「純粋に真実で篤く強靱な愛情」（p.413）を持った彼女がサヌーティの死を予言するのだ。彼女は息子や夫、さらにはイェマシー族が恥辱に甘んじるのを潔しとはしない。その前に敢然と息絶える方を選択するのだ。

シムズはロマンスとノヴェルを意識的に区別しているが、『イェマシー族』の序文でロマンスを叙事詩と同類のものだと述べている。これまで筆者が分析してきた喜劇的構成を存立させているのは、インディアンの蜂起と破滅という叙事詩的、悲劇的要素であることは誰の目にも明らかである。従って、シムズが陰画として機能するインディアンの自滅的行為をどのように捉えていたかを具に考察すれば、先程の疑問はある程度解明できると思われる。

シムズが『若き詩』に発表した「イェマシー族の最後の者」では、若いときのシムズの非常にロマンチックなインディアン観が吐露されている。インディアンの蜂起は彼らの自主独立のためであり、その敗北は憐憫の情

を催さずにはおかない。

HE fought his nation's foe, 'till Night
  Had cast her mantle round;
Nor in the dark, unequal fight,
Where freemen battled for their right,
  Gave undisquted ground:–
His followers died before his face–
He stood-the last of all his race!
. . . .
And will he tamely fall or fly,
  Survivor, last of all his land;–
Recreant, that did not dare to die,
When Country, Vengeance, Liberty,
  Alike his death demand–
Or, will he from the mountain spring ?–
They may not tame the Eagle's wing![14]

では、『イェマシー族』はどうか。白人がサウスカロライナ州の大西洋岸沿いのボゥフォート地方の植民地を築いたときから、イェマシー族は付近一帯を支配する「強大で勇猛果敢な部族」(p.28) であったとシムズは描写する。サウスカロライナのインディアンを扱った歴史書を紐解けば、シムズの描写は史実とはかなりかけ離れていることがわかるが、しかし、少なくともシムズがそのように理解していたことは、彼の著書、『サウスカロライナの歴史』に明らかである。そこに弱小部族を巨大視して白人植民地の戦いを誇張する意図を勘ぐることは難しいだろう。[15]シムズにとってイェマシー族は偉大な部族として歴史に存在したのであり、白人を生かすも殺すも彼ら次第であった。

しかし、イェマシー族は彼らの力ではいかんともしがたい運命に晒されてもいる。コロンブスの航海の偶然が引き起こした必然、即ち、白人開拓者の増大と開拓地の繁栄である。物語が始まる時点では既に白人勢力がインディアンを凌駕するまでに至っており、イェマシー族は破滅の道を転がり落ちるしかない。この部族の「慕われた酋長」サヌーティは洞察力のある「哲学者」だが、彼は既に白人の方が大きな勢力になっているということを賢明にも認識したからこそ蜂起するのである。部族を待ち受けている宿命を嘆きながらも、自由と愛国主義のために戦うことを決意するのだ。古代ローマの元老議員にも似た高潔な人物と評されるサヌーティは、外からの宿命に敢えて立ち向かうのである。

> He [Sanutee] was wise enough to see, that, in every case of a leading difference betwixt classes of men, either in colour or organization, such difference must only and necessarily eventuate in the formation of castes; and the one conscious of any inferiority, whether of capacity or of attraction, so long as they remain in propinquity with the other, will tacitly become subjects if not bondmen. (p.39)

複数の文化、人種は平等に共存できないという認識がここにある。さらには自らの劣等を認識した方の文化と人種は相手の軍門に下らざるをえないということが付け加えられている。

サヌーティの回りのインディアンはイェマシー族が白人よりも劣っていることを身をもって証明している者が多い。酒に溺れ、昔の栄誉を失っている息子のオコネストーガ、長老でありながら白人の安ピカ物に目を奪われて、先祖代々の土地をただ同然に白人に売り渡してしまう契約を結ぼうとするハスパーたち酋長連。それだけではない。サヌーティですら白人がもたらした体にぴったり合う服を身にまとい、石斧に代わってトマホークを携えており、呪い師にしても白人からもらったけばけばしい赤い服を着

ているのだ。このように部族の堕落を招来させたのはサヌーティら酋長連の洞察する力の欠如にあったことをサヌーティは認識してもいる。白人文明の隆盛という必然は、実はインディアンの側の洞察の欠如が原因であった。イェマシー族が親しくし、歓迎し、部族の土地を寛大に提供した白人の代表する文明の無慈悲ぶりは、彼らの理解を遥かに超えるものであった。

> It is in the nature of civilization to own an appetite for dominion and extended sway, which the world that is known will always fail to satisfy. It is for her, then, to seek and to create, and not with the Macedonian madman, to weep for the triumph of the unknown. Conquest and sway are the great leading principles of her existence, and the savage must join in her train, or she rides over him relentlessly in her onward progress. Though slow, perhaps, in her approaches, Sanutee was sage enough at length to perceive all this, as the inevitable result of her progressive march. (p.92)

このふたつの文化の衝突の中では、それまでイェマシー族が取ってきた「ローマ人と同じように賢明にも被支配者を征服者の中に組み入れることによって勢力を強化する」(p.28) という方策は機能しない。ゲルマン人を軽蔑しながらその浸透を許し、さらにはその勢力に依存することによって滅びたローマと同じように、イェマシー族は破局に向かっていく。この点ではサヌーティが部族の破滅の不可避性をある程度まで意識していることは確かだ。しかし、彼は闇雲に部族の破滅を引き起こそうとしている訳ではない。ハリソンに植民地から逃げ出すよう勧告するサヌーティは、自分の計画が巧く行くという確信をも抱いているのである。彼の存在こそがやがて必然的に到来する部族の奴隷化を阻むものとして作者によって提示されており、部族のためには息子を廃嫡することもいとわない彼の非情さも威厳のあるものとして描写される。

サヌーティは「優れた政治家」(ハリソンとはいかに違うことか！) であり、陰謀の計画を直情的に民衆に押しつけることはしない。実際、イェマシー族は幾人かの酋長の合同権威によって支配され、国家的方策を決めなければならぬときは議決には絶対多数が必要とされる政府形態であった。酋長も選挙制で、最高位の酋長もしかるべく選ばれた。民衆の意思を無視する酋長は少なかったが、無視した場合処罰された。このような民主的な政治形態の中で、白人に土地を売ろうとする酋長連も、これを阻止しようとするサヌーティたちも、民衆の声を聞き、これを誘導することが必要であった。蜂起の計画を一部の酋長と自分の胸の内におさめていたサヌーティも、土壇場になれば町中を歩いては「最も幅をきかせ恐れを知らぬ者」、「無謀な者、軽率な者、無知な者」(p.108) に対して「あらゆる感情や理解力に適した話し方」(p.108) で訴えて回る。ハリソンが放任する白人議会の貪欲におもねたハスパーたち酋長連の権力を転覆させるには、こうして得た民衆の声を集中させ、インディアンの議堂に押し寄せ、力で協定を粉砕するしかなかった。シムズがニコルズにおいて論難したはずの愛国主義と自由の追求は、サヌーティの性格描写の中で積極的に評価される。

こうして民主的な共和国家イェマシー族は古代のギリシアやローマと結びつけられていく。イェマシー族の原始的状態は認識不能な不可解の世界に幽閉されず、古代白人文明の習慣と関連づけられていく。この古代白人文明との比較・連想はインディアンに文化的、歴史的実体を認めぬ神話化に向かう危険性を伴うが、しかし、シムズは統一された神話化の方向を選択はしない。インディアンを白人文明の過去に結びつけるにしても、当時よく行われたさ迷えるユダヤ民族の一部族や、高貴な原始人という殻に閉じ込めはしない。[16]比較比況は現前する種族を理解するための一手段でしかない。インディアンが寡然で感情を露にしないという世俗的偏見を矯正するためには、ただインディアンは英語が話せぬだけであり、また劣等意識を表に出さぬためのカムフラージュであると暴露することもやってのけ

るのである。

イェマシー族の行動を支配する神はモーロックのように血と犠牲を部族に強制する神オピチマネイトウだが、しかし、シムズによればネロが血を求める快楽を発見したように、この快楽は世界中の人間の経験に共通するものであり、決してインディアン特有のものではない。戦いの踊りや死の踊りも狂気じみて異様に見えるが、著しく自然で素朴であり、歴史的に発展してきた年代記なのであり、「いつもは人間というより機械に見えるインディアンの戦士は、奮い立たせるような機会には呪い師と詩人の旋律をアポロの巫女ピシアのあの荒々しい様々な動きに合わせて」(p.278) 踊るのである。マチワンが様々な生き物の鳴き真似をして見張り役のインディアンを眠らせる業は、ヘブライ人が悪魔に取りつかれた精神を宥めるときに使うものであり、ダビテ王の調子の美しい慰安の儀式に使われる物と同じだ。文明化されていない種族の持つ特色は皆同じであるともシムズは言明する。

> The elements of all uncultivated people are the same. The early Greeks, in their stern endurance of torment, in their sports and exercises, were exceedingly like the North American savages. The Lacedaemonians went to battle with songs and dances; a similar practice obtained among the Jews; and one particularly, alike of the Danes and Saxons, was to usher in the combat with wild and discordant anthems. (p.278)

様々な方向に分散しながらも、インディアンの実体は古代白人文明の象徴の中に集約されていくが、シムズの主眼はインディアンの「非文明的」「狂気じみた耳ざわりな」存在が常軌を逸したものではないことを指摘することにある。

古代白人文明との比較対照はこれだけに終わらない。「古代ローマ人の

愛国主義的性格」(p.200) でサヌーティは息子を処罰せんとするが、処罰が行われる深い森の陰気な円形演技場にはあごひげを生やしたドゥルィド僧のような古い樫の木があり、オコネストーガを取り巻く老女たちは「スコットランド領主の三人の魔女」(p.202) さながらである。イェマシー族に限らず南部のインディアンは、国家の誇り、部族の名誉に対して「スコットランドの高地人」(p.256) に負けず執着している。イングランド人はインディアンたちにとって「嘘つきであり、盗人であり、裏切り者であり、いかさま師であり、殺人者であり、マネイトウのご加護がない者」(pp.265-266) であった。ここには完全にスペインやイギリスとの衝突を越えた、古代ケルト人やスコットランドと、イングランドの対立がイェマシー族と植民地の対立の比喩として使用されている。結局のところ、イェマシー族の行動は人間の経験に共通するものであり、著しく自然で素朴でありながら、その共和制社会はイギリス植民地とは決定的に対峙する社会なのだ。

シムズが政治的状況を導入することにより白人神話を意図的に破壊する現場をひとつ紹介しておこう。文学的イメージとしての蛇はまたかなりの程度において神話と関係するが、これに関しても白人とインディアンの見解の対立が顕著に提示される。蛇は部族のトーテムとしてインディアンの特色を示す象形文字として頻繁に登場する。セランナー族やクリーク族のトーテムなどがそれだ。蛇はインディアンのすばやい隠密行動を象徴するばかりか、小鳥、獣、昆虫などの動物や草木と同じく、大地に生きる彼らの生活から生まれたイメージであり、「西洋スモモの森と幸福の谷」(p.113) を保証してくれる名誉の印でもある。しかし、背の低いクーソー族のチナビィが陰険な蛇のようにとぐろをまいてハリソンに飛びかかるように、蛇には白人がインディアンに対して抱く陰険なイメージも付与されている。聖書や神話に登場する悪のシンボルである。このトーテムとシンボルの衝突がエリザベスがガラガラ蛇に襲われる場面に具現化する。ここにはシムズのアメリカ神話に対する神話的次元の疑問が提出されている

と言ってよい。

快適な暖かいある日、彼女は小川のせせらぎ、小鳥のさえずり、梢のそよ風の音に満ち溢れた美しい逢瀬の場所でハリソンを待っている。待てども来ぬハリソンに心ここにあらずの状態にあった彼女の視線は、特にひとつの地点に向けられる。緑葉の輪の間から漏れてくる曰く言い難い閃光に彼女は心奪われ、呪文で縛られたかのように動けなくなる。蛇の見事な色彩と灌木を混同していた彼女は、蛇の近づく音に、華麗だが危険な存在の本質を見て取る。おびえながらも叫ぶこともままならぬ彼女は、蛇の牙にかかる直前に気を失うが、このとき雑木林からオコネストーガが現れ、一本の矢で蛇を射抜き、彼女を助ける。彼が彼女の体から蛇をどけると、このとき意識を取り戻した彼女は蛇と彼を同一視して叫び声を上げ、再び気を失い、ここに駆けつけたハリソンが誤解してオコネストーガを責める、という場面設定である。

このガラガラ蛇を取り巻くストーリーはインディアンが自滅していく過程のアレゴリーである。[17]と同時に、第二の楽園たるアメリカの森に存在する悪、つまり蛇＝インディアンは排除しうるものであり、事実エリザベスはこの悪から身を守ることができる。しかし、シムズはこのアメリカの神話化の過程に白人文明の暴挙を絡まさずにはおかない。シムズによれば、インディアンの間で広まっている感情を考慮すれば、ガラガラ蛇は蛇の中の紳士、貴族であり、勇猛で決して敵からは逃げないが、戦いを先に始めることはせず、侵略から自己防衛することで満足しているのである。この意味で白人文明の襲撃から身を守ろうとしてやむなく攻撃するイェマシー族とガラガラ蛇は重複するのだが、この場面においてはガラガラ蛇が無抵抗の彼女を攻撃するという設定になっているのだ。この矛盾は何を意味するのか。

実は、蛇がエリザベスに認識させる「邪悪な存在」はインディアンの邪悪を象徴しているのではない。確かにガラガラ蛇は無抵抗の彼女を攻撃する。しかし、彼がその華麗な姿を隠している森は、せわしい生活の絆から

解き放たれ、幼い頃のまだ純真な性質に戻れる場所であり、詩的感興を感得できる情景である。未だに未知の人物であるハリソンを深く献身的に愛することを決意した彼女だからこそ、回りの情景に詩人のごとく感応したのである。しかし、完全に彼を信じ切ることのできない彼女は、次には影が陽光に付き従うかのように、「希望にくっついて恐怖がやってきた」（p.168）ことを意識し始める。存在に対する疑いが生じ、生命のはかなさと変動が彼女の楽しい思考に忍び寄ると、これまでは気づきもしなかった「美しいが恐ろしい物体」の存在を認識し始める。「華麗だが危険な存在の本質」はガラガラ蛇として姿を現し彼女を攻撃する。一見するとエデンの園に姿を現した蛇の神話、悪と善というキリスト教的二元論を想起させるが、是非とも注意しなければならないのはハリソンの未知の部分が彼女に影をもたらすということである。ガラガラ蛇は初めからその美しい姿を園に潜めているが、彼女は最初これには気づかない。彼女は影を振り払おうとして蛇のいる緑葉のところに視線を集中させ、これによって恐怖を経験する。ハリソンは彼女の知らぬ未知の部分において植民地を救おうとインディアンを偵察しており、この行為が美しい蛇を獰猛な動物に変身させる契機となっているのである。蛇は邪悪なものとして存在しているのではなくて、白人の行為と意識によって邪悪な存在に変容させられるのだ。そればかりではない。ガラガラ蛇は堕落の中にありながらも蛇を尊敬しているオコネストーガに殺される。ところが、このオコネストーガの行為ですら、ハリソンはエリザベスを襲う行為として解釈してしまうのである。

白人の手先となったオコネストーガは父親と母親の手で殺されてしまう。相手を邪悪な存在に変えてしまうことで自らの暴挙や罪意識をも正当化しようとする無慈悲な白人文明を目の前にして、インディアンは自らの独立と自由を守るために自らの手で命を絶つのである。しかし、この自らの命を絶つインディアンの行為ですら、白人は自分たちへの攻撃としてしか解釈しないのだ。ここが古代ローマ人やサクソン人とインディアンとの違いであった。ローマ文化は実に七百年の断絶の歳月を経て西欧文明に蘇

り、また、シムズがスコットの歴史ロマンスに見るように、サクソン文化はノルマン文化の中に命脈ばかりか、均衡を保つまでに復活した。しかし、アメリカの歴史においてはインディアンの文化は主流たる白人文化に全く影響を残すことは許されなかった。この点において、シムズが関連づけようとしたイェマシー族と白人古代文明の連想の糸すらも断ち切られてしまう。アメリカの歴史と政治の実態は、シムズにインディアン神話の創造も許さぬほどに対決的であった。

無論、『意見と書評』の中では、シムズは文明化に向かって邁進するチェロキー族に二つの文化の混淆の可能性を見い出し、放浪を放棄したインディアンの文化がホメロスの作品のごとく花開くことに期待を寄せているところがある。しかし、アメリカの歴史的展開の中ではインディアンは放浪することを止めず、白人はインディアンを同じ人間として認識することはないという現実をさすがのシムズも直視せざるをえない。だからこそ彼の苛立ちは高じ、白人文明に屈服しようとしない彼らを初期のうちから徹底的に征服しておれば状況は違っていたと、傲慢不遜で「散漫な」結論を言明して見せることまでやってのけるのだ。[18]

シムズのインディアンに対する微妙な姿勢を明らかにするために、彼の短編に少し言及しておきたい。初期の短編「インディアン・スケッチ」で「有害なほど誘惑的な影響」を与える「火の水」を初めて口にして泥酔したウーラティビィは、酒の危険を諌めようとするメワントウを我知らず殺してしまい、発狂せんばかりにこれを後悔、部族の掟に従い、死の刑罰を進んで受ける。語り手の「私」は「白人が知ろうともせずに軽蔑してしまっている部族」のやり方、「無知な野蛮人が野蛮だが本当に公平な法に対して見せる奇妙なまでの従順さ」に好奇心を示すばかりか、頭がこれで一杯になってしまう。毅然として刑の執行場所に向かうウーラティビィの歩みは白人の擬似ヒロイズムとは違っており、彼が歌う歌も「私」には理解できないが、ローマ人のように誇りを持って歌われる。[19]

これをさらに敷衍した短編「オアカティッビィ、別名チョクトー族のサ

ムソン」では、インディアンを白人社会に同化させることが可能かどうかの議論が、1820年代に南西部を旅行する語り手「私」とハリス大佐の間で展開される。「誇り高く、陰気で、口数の少ない放浪する種族」を巧く騙して、「屈辱的とも言える道徳的社会的退廃」から「非常に単調で魅力に乏しい」「骨の折れる、おきまりの勤勉」に移行させることができるかが論点であった。ハリス大佐が金のためにはインディアンも働かざるをえないと主張するのに対し、「私」は肉体的側面を除けばインディアンは子供同様であり、責任ある地位に就かせ教育するには彼らがいかに無知であるかを知らしめるのが必要であり、そのためには強制的に抑圧するのが一番だと答える。いつまでも抑圧しておくわけにもいくまい、いつ解放するのかと逆に質問された「私」は、「イスラエルの子供たちがモーゼという指導者を持てるほどに知的に進化したときだ」と答える。ハリス大佐はフレノーが詩に歌ったインディアンの件を持ち出し、インディアンがキリスト教社会に順応することに疑問を呈する。「私」は個別のインディアンを他のインディアンから切り離して教育することの愚と危険性を指摘し、ヘブライ人やサクソン人の場合と同じく種族全体を同時に感化すべしと主張する。この「私」はこう言いながらも、ヒュー・グレイソンと同様に膚の色の違いから人種の混合が許されないのは神の御心だとも述べる。ハリソン大佐が「私」の意見に完全に説得されていないところへ、綿摘みを済ませたインディアンの一団がやって来る。その中にオアカティッビィという立派な青年がいる。高潔で人のよさそうな性格だが、綿摘みをやっているようでは「堕落者」に違いないと「私」は判断する。これはハリソン大佐によって否定されるが、さらには後に起きる殺人事件によって「私」の判断が誤っていることが証明される。仲間の非を責めて争いとなり、その仲間を殺してしまったオアカティッビィは部族のしきたりによって死の宣告を受け、これを受け入れる。余りに馬鹿げていると考えた「私」とハリソン大佐は彼に逃亡を促し、苦悩の末彼はこれを受け入れて逃亡するが、これは部族に混乱を引き起こしたため、結局彼は立ち帰り、死刑にされる。刑

が執行されるのを見ていた「私」は、威厳を持って死に向かう彼の姿に白人がヒロイズムを披露しようとするのとは違った威厳を感じ取る。彼の死の歌の意味はひとつとして「私」には理解できなかったが、その「雄弁さ」（p.207）は感じ取れた。これまでの「私」とハリソン大佐の議論がたわ事にしか見えないほどに、オアカティッビィの姿は「私」の目に「国家の父」として焼きついたのである。[20]

以上のように、二つの文化の混淆を希求するシムズが提出するインディアンの生の縮図では、インディアンの不条理、不可解の世界から条理、認識の世界への移行には必ずその死が随伴している。その死は威風堂々と雄弁にインディアンの本質を露呈させ、この行為の前では、同化か死か、それとも強制排除かといった白人が持ち込む粗雑な選択肢は、是々非々を知らぬ白人の戯言もしくは無用の長物でしかない。インディアンは単調で魅力に乏しい白人文明に依拠するよりは、道徳的社会的退廃と死を自らの意志で選択するが、「我々白人は自らを人間と称せんがためにインディアンを思慮の欠如した存在を決めつけなくてはならないし、文明を尊重し崇拝しているところを見せんがためにインディアンが矯正もままならぬ存在であったと証明して見せないと気がすまない」[21]のだ。

今一度『イェマシー族』に立ち返り、白人開拓地とインディアン社会のこの作品における位置づけについて考えて見よう。シムズは物語が白人植民地とイェマシー族の武力衝突の山場にさしかかったところで次のように書いている。

> The fancy may play capriciously only with the unknown. Where history dare not go, it is then for poetry, borrowing a wild gleam from the blear eye of tradition, to couple with her own the wings of imagination, and overleap the boundaries of the defined and certain. We have done this in our written pages. We may do this no longer. The old chronicle is before us, and the sedate muse of history, from her

graven tablets, dictates for the future. We write at her bidding now. (p.404)

クレイヴン卿と民間人エリザベスとの結婚はフィクションだが、同時にクレイヴン卿とインディアンとの個人的接触も、またインディアンの女のために命を救われたということも歴史的事実ではない。ハリソンとイェマシー族との接触は作家シムズの「未知の部分」の創造であり、その中でシムズは「限定され明白な」歴史に自分の「詩」を付与したのだ。これは決してインディアンを浪漫的に描き、かつ同時にインディアン排除の立場を取ろうとしているのではない。[22]前者は後者を突き崩し、その露わなまでの弱体ぶりを露呈させてしまうのである。先程筆者は、インディアンに関する章以外の章はすべて退屈極まりなく二つの文化の衝突の展開とは無縁のものだという McWilliams の見解を引用したが、今筆者が述べている視点からすれば、この見解は陰画の世界を強調する余り逆にそのインパクトを喪失させてしまうものだ。フロンティア熱に突き動かされる陽画の世界があるからこそ、政治と神話が相剋する陰画の世界は得心が行くのである。確かにハリソン⇔ヒューという陽画世界での衝突と和解はサヌーティ⇔オコネストーガという陰画世界での対立を圧殺してしまうが、同時にそれは政治世界から神話世界への逃避を空疎なものとして糾弾するのである。陽画世界は陰画世界の存在と崩壊には何ら注目もせず安定に向って邁進していく。そのエネルギーは神話を歪曲した形でしか存在させない。ハリソンは「限定され明白な」世界の住人の役割にただ徹するだけであり、歴史の力にあらがうことなくイェマシー族と対決する。ヒュー・グレイソンは階級制度への不満を白人のみに限定して容認し、かつそれをフロンティアのエネルギーの中で完全燃焼させてしまう。彼らはチェロキー族に自由奴隷の地位しか与えず、投票権も教育を受ける権利も白人に対して訴訟を起こす権利も与えようとしなかったジョージア州知事のジョージ・トループ、これを追認したジョン・カルフーン、そしてジョン・クィンシー・ア

ダムズ、アンドルー・ジャクソン両大統領と同じであった。[23]しかし、だからこそ自らの意志で過去を反省し、自らの自由を民主的な形で人民に訴えて遂行しようとするサヌーティは、死ぬという行為によってこの二人の白人より強烈に読者の脳裏に焼きつくのである。そして、白人文明によって歴史から抹殺されていくサヌーティは、ナティ・バンポーにもチンガチグックにも変貌することはなく、ひとりの現前するインディアンとして消えていくのだ。これがシムズが捉えた歴史的真実であった。

ノースロップ・フライは神話の理論の中で神話は文学的な構想の一方の極であり、自然主義はもう一方の極であり、その中間にロマンスの全領域が横たわっていると述べている。[24]シムズのロマンスは同じようにロマンスに固執したホーソーンのそれとは決して同じではない。そこには神話化を拒否する写実主義が多分に機能している。たとえそこに白人至上主義的限界があろうとも、シムズには政治的社会的問題を神話化することができないと読者に鮮明に言明するがごとく、写実主義に執着した。それが当時のアメリカの実態を直写しているのだという自負心が彼にはあった。だが同時に、シムズのロマンスは「未知の部分」を描くことを目的とするがゆえに外面的写実主義に固執することはなかった。この意味で、『イェマシー族』は作家シムズが神話化を拒否することによって政治の世界にとどまりながら政治の暴虐を指弾することができた「ロマンス」であった。

「イェマシー族の最後の者」を改訂して出版したシムズは、イェマシー族の蜂起がスペインの策略であり，白人植民地が救われたのは非常に幸運であったと詩の冒頭で注釈している。サウスカロライナの子供に州の歴史を分かり易く教えることを目的とした『サウスカロライナの歴史』(1840)では、チェロキー族問題では白人の側の暴虐に触れながら、シムズはイェマシー族については白人植民地の危機と防御にしか言及していない。改訂版『サウスカロライナの歴史』(1860) では、「インディアン特有のきまぐれから蜂起した」という一文をシムズは付け加えている。[25]しかしながら、彼のインディアンに対する人種差別を主張せんがためにこのような事実を

援用することに対して、我々は慎重でなくてはならない。「明白なる宿命」とやがて称されることになるフロンティア精神に名を借りた当時のアメリカ、特に南部の暴挙の中で活動するには、政治家、歴史家、作家という三足のわらじはシムズにとっては余りに重い負担であったに違いない。しかし、少なくとも作家シムズは歴史の中の「我々の信念に疑いを差し挟むようなものの存在」[26]に執着していたことは間違いないのである。

註

1 *New England Magazine*, VIII (June, 1835), 489-490.

2 Ricard Chase, "Myth as Literature," in James E. Miller, Jr., *Myth and Method: Modern Theories of Fiction* (University of Nebraska Press, 1960), p. 135. 因みにこれはチェイスがマリノフスキーから引用した定義である。

3 Northrop Frye, *Anatomy of Criticism: Four Essays* (Princeton: Princeton University Press, 1957), p. 136.

4 Myra Jehlen, "The Novel and the Middle Class in America," in *Idelogy and Classic American Literature*, Sacvan Bercovitch and Myra Jehlen, eds. (Cambridge: Cambridge University Press, 1986), p. 127.

5 cf. R.W.B. Lewis, *The American Adam* (Chicago: The University of Chicago Press, 1955), pp. 1-10.

6 スティーヴン・アンガー著（千葉文夫訳)、『ロランバルトーエクリチュールの欲望』勁勁書房、1989年)、p. 87からの引用。尚、本稿は同じくバルトの神話の定義を活用したLucy Maddox,*Removals: Nineteenth-Century American Literature and the Politics of Indian Affairs* (Oxford University Press, 1991)に刺激を受けた。神話が「非政治化された言説」であるという点では筆者はMaddoxに賛成だが、彼女の視線はあくまでも異質性を赤裸々に暴露する政治問題を家族神話の中に閉じ込めることに心血を注いだ作家たちにあり、幾多の言及はあるものの、シムズはこの点で彼女の関心の対象外である。

7 Willam Gilmore Simms, *The Yemassee*, ed. Joseph V. Ridgely (Schenectady, N.Y.: New College and University Press, 1964), p. 22.以下、この作品からの引用はすべてこの版により、ページ数は括弧に入れて示す。

8 William G.. McLoughlin, "Georgia's Role in Instigating Compulsory Indian Removal," *The Georgia Historical Quarterly*, 70 (1986), 605-632.

9 William Gilmore Simms,*The History of South Carolina* (Charleston, S.C.: S. Babcock and Co., 1840), pp. 98-99: "Expelled from the allies whom they could no longer serve, their future abodes were found in the everglades of the

Seminoles, of which people they are conjectured, with sufficient plausibility, to be the ancestors."

10 Maddox, pp. 8-9.

11 Robert Scholes and Robert Kellogg, *The Nature of Narrative* (London: Oxford University Press, 1966), pp. 225-226.

12 John P. McWilliams, Jr., *The American Epic: Transforming a Genre 1770-1860* (Cambridge: Cambridge Unversity Press, 1989), p. 151.

13 *Views and Reviews in American Literature, History and Fiction*, 1st series (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1962), p. 44.

14 William Gilmore Simms, *Early Lays* (Charleston, S.C.: A.E. Miller, 1827), pp. 65, 67.

15 Richard C. Shaner, "Simms and the Noble Savage," *American Transcendental Quarterly*, 30 (1976), 18-21. Shanerはイェマシー族の力をシムズが強大にしたのは、イェマシー戦争を国家創造のための叙事詩的奮闘にふさわしいものとするためだったと結論づけているが、『サウスカロライナの歴史』(本稿註の25を参照)を見てみればわかるように、シムズの歴史的理解の上ではイェマシー族が強大であったことは確かである。

16 cf. William G. McLoughlin and Walter H. Conser, Jr., "The First Man Was Red'—Cherokee Responses to the Debate over Indian Origins, 1760-1860," *American Quarterly*, Vol. 41 (June, 1989), 243-264.

17 L. Moffitt Cecil, "Symbolic Pattern in *The Yemassee*," *American Literature*, 35 (1964), 50-54.

18 *Views and Reviews*, pp. 128-147.

19 *The Writings of William Gilmore Simms*, Centennial Edition, Vol. V, *Stories and Tales*, ed. John Caldwell Guilds (Columbia, S.C.: University of South Carolina Press, 1974), pp. 3-7.

20 William Gilmore Simms, *The Wigwam and the Cabin* (Chicago: Donohue, Henneberry & Co., 1890), pp. 176-208.

21 *Views and Reviews*, p. 142.

22 Shaner, 20はこのように否定的にこの作品を捉えている。近世初期にあってヨーロッパ人がインディアンばかりか世界中の奇怪なもの、奇妙な風習を収集して陳列し、これを文化的他者を消去する一手段として用いたことに関しては、スティーヴン・マレイニーの興味深い論文がある。しかし、筆者の論の展開からも窺い知れるように、シムズの場合、文化的他者を取り組むと同時にこれを排除するという儀式は全く存在しない。スティーヴン・マレイニー「奇怪なもの、野卑な言葉、奇妙な風習：ルネサンス後期における文化のリハーサル」(篠崎　実訳、

『現代思想』、1989年2月号）を参照。

23 William G. McLoughlin, 605-632.

24 Frye, pp. 136-137.

25 具体的に引用すると、*The Book of My Lady*では"The Yemasses were a powerful nation of savages, occupying, in the lower parts of the state of South Carolina, a tract of country extending from Beaufort on the sea coast. *Incited to insurrection by Spanish persuasion*, they had laid a deep plan for the destruction of the Carolinians, in which with the cunning of Philip, they had contrived to involve many of the independent tribes. *Fortunately for the whites*, the design was discovered, and in the contest which ensued, the Yemassees were completely exterminated as a nation." ［*The Yemassee* ed. Alexander Cowie (New York: American Book Company, 1937), pp. 373-374 を参照］、*The History of South Carolina* (1840), pp. 96-97では"The numerous and powerful tribe or nation of the Yemassees, possessing a large territory in the neighborhood of Port Royal, had long been friendly to the Carolinians. They had engaged as allies in most of the wars against the Spaniards, the French, and Indian tribes; had done good service, and always proved faithful. *Instigated by the Spaniards at St. Augustine* ... the Yemassees *suddenly* appeared in arms."、*The History of South Carolina* (New York: Redfield, 1860), pp.86-87では"The numerous and powerful tribe, or nation, of the Yemassees, possessing a large territory, in the neighborhood of Port Royal, had long been friendly to the Carolinians. They had engaged, as allies, in most of the wars against the Spaniards, the French, and Indian tribes; had done good service, and always proved faithful. *But, with the usual caprice of the red men, they suddenly became hostile. Instigated by the Spaniards, at St. Augustine* ... the Yemassees also appeared in arms, in 1715."とシムズは書いている。尚、引用文中のイタリック体はすべて筆者によるものである。

26 *Views and Reviews*, pp. 60-61.

（平成5年1月8日　受理）